インタビュー

いま、あなたに伝えたい

仁藤夢乃さん

にとう　ゆめの／夜の街でのアウトリーチ、シェルターでの保護やシェアハウスでの住まいの提供など10代女性を支える活動をおこなう。主な著書に『難民高校生－絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル』（英治出版、筑摩書房）、『女子高生の裏社会－「関係性の貧困」に生きる少女たち』（光文社新書）。

出向いてつながる「バスカフェ」

Colabo（コラボ）では、虐待や性暴力被害にあうなど家庭が安全な環境ではなく、居場所のない10代の女の子たちを支える活動をしています。

週に一回、「TsubomiCafe（つぼみカフェ）」というバスを使った移動型の夜カフェを渋谷と新宿で開催しています。ピンクのバスが目印でごはんや飲み物を無料で置いていたり衣類やコスメ、コンドームなど生活に必要なものをカフェに来た子たちが持ち帰れるようにしています。

もともと私たちの活動は、夜の街での声かけからはじまったんですが、ただ声をかけるだけでは、その場でつながりをつくることがむずかしいんです。移動できるカフェを通して、「今日はここでやっているからおいでよ」「来週あそこでやるよ。ラインで案内するから登録してね」とまずは出会った女の子たちと顔見知りになるためにはじめました。

バスカフェは韓国の活動を参考にしています。ソウルには、行政がやっているバスを含めて市内だけでも7団体が街に出向いてバス専門で活動をしています。

よく日本の支援現場では困っている子たちが相談に来ないといわれますが、私たちのほうから女の子たちがいる場所に出て行くことが必要です。日本の福祉って相談に来るのを待っているのが基本ですよね。でも学校に行っている、働いている子たちは相談に行こうと思っても行政支援の窓口時間には間に合いません。

第1回

10代の女の子たちを支える

探して、みつけて、つながる

私は10代のころ、家が安心していられる場所ではなかったので夜は公園などで過ごしていました。そうすると「早く帰りなさい」と警察がきて怒られました。家が安心して過ごせる場所じゃないから学校やバイトが終わった夜、外に出てたむろしているのに怒られてしまうんです。帰れるなら帰りたいし、困っているはずなのに「非行少女」「家出」と言われ補導されれば家に連れ戻されてしまいます。

今でも、家にいられないで夜の街をさまよっている子たちに対して公的機関でアウトリーチのような対応をしているのは唯一、警察の補導くらいだと思います。本当は処罰や取り締まりのためではなく、福祉的な視点でかかわる大人が必要ですが、そういった大人はあまり夜の街には出ていません。

Colaboの活動で女の子たちと出会ったとき、あきらめ感が強かったり自暴自棄になっている子がすごく多いです。これまでの大人との関係のなかで助けを求めることをあきらめさせられていたり、人に頼ったり助けを求めることを悪いことだと思っている子もいます。自分のせいで大変な状況になっているんだと自分を責めていることも多いので、困っていることをだれかに相談しようとは思えません。そういう子たちが自分でなんとかしようと思って、街に出たり、SNSでだれか家に泊めてくれる人を探そうと考えます。ある意味で自立的というか、自分でなんとかしなきゃという思いが強いんです。でも、そこにつけ込む性搾取を目的とした大人が多いことが現状です。

だからこそ、女の子たちがいる場所に出て行ってつながろうとする、困っている子を探して、みつけて、つながろうとする。そのために夜の街での声かけやバスカフェの活動をしています。

ただ待っているんじゃなくて、こっちから出かけていって出会おうとしないと、出会えない子たちがいます。

▲無料の飲み物や食事が並ぶ。バスのデザインは女の子たちと考案。カフェでは「支援」や「相談」を前面に打ち出すのではなく、気軽に立ち寄りやすい場づくりを大切にしている。